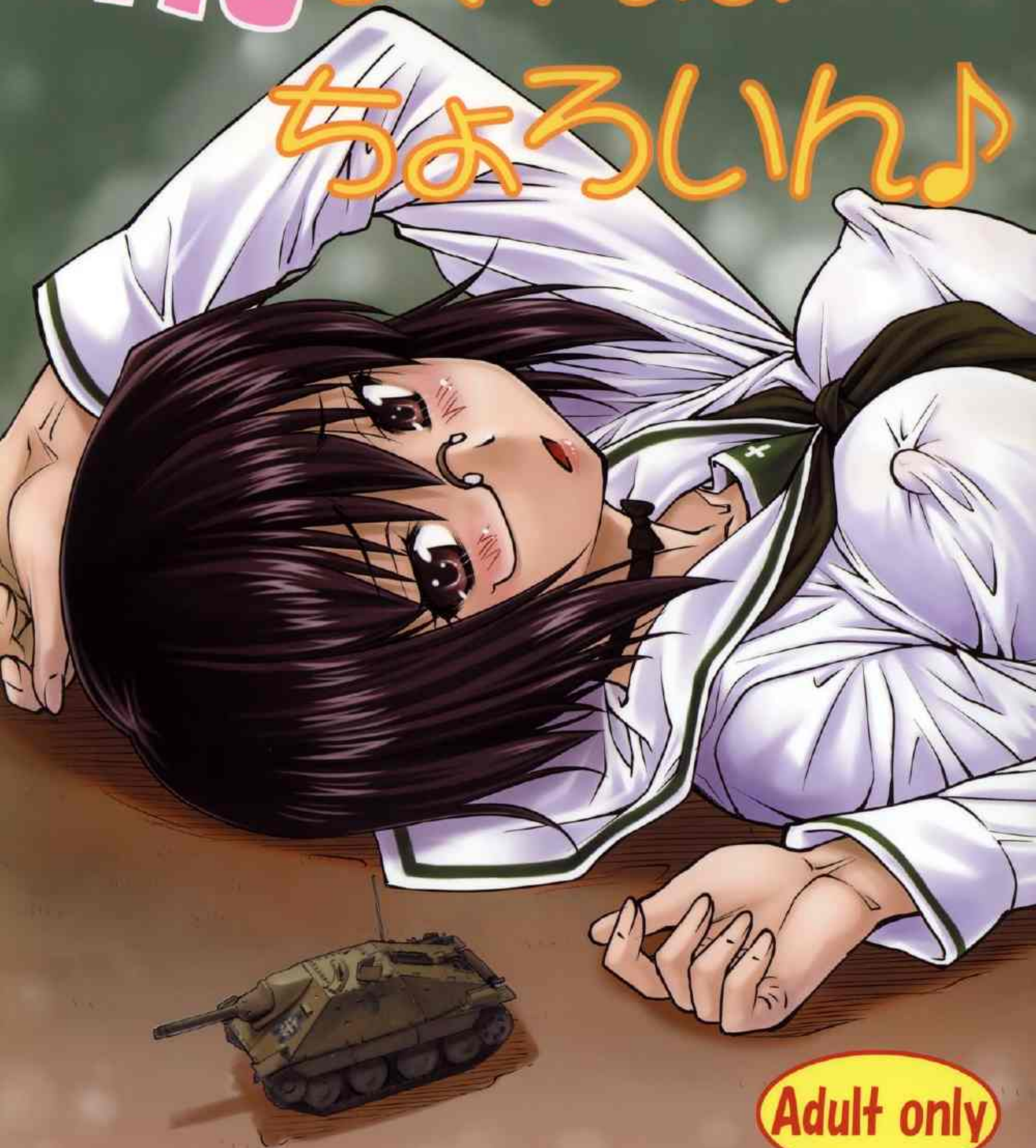


桃 ちゃんは

ちよろしいん♪



Adult only

桃
ちゃんは
ちよろしい♪

LeLe!ぽぽ
Vol.26



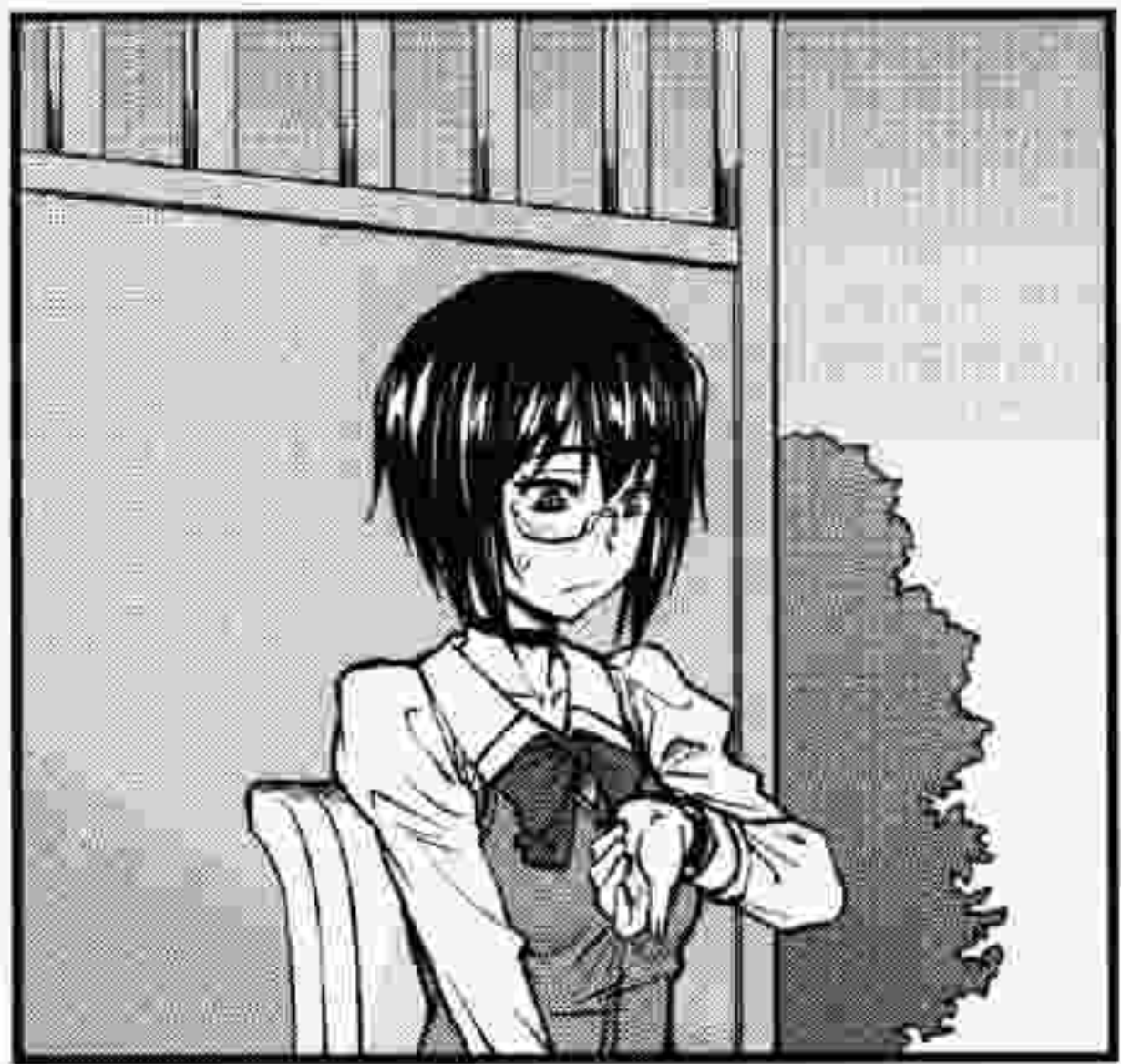
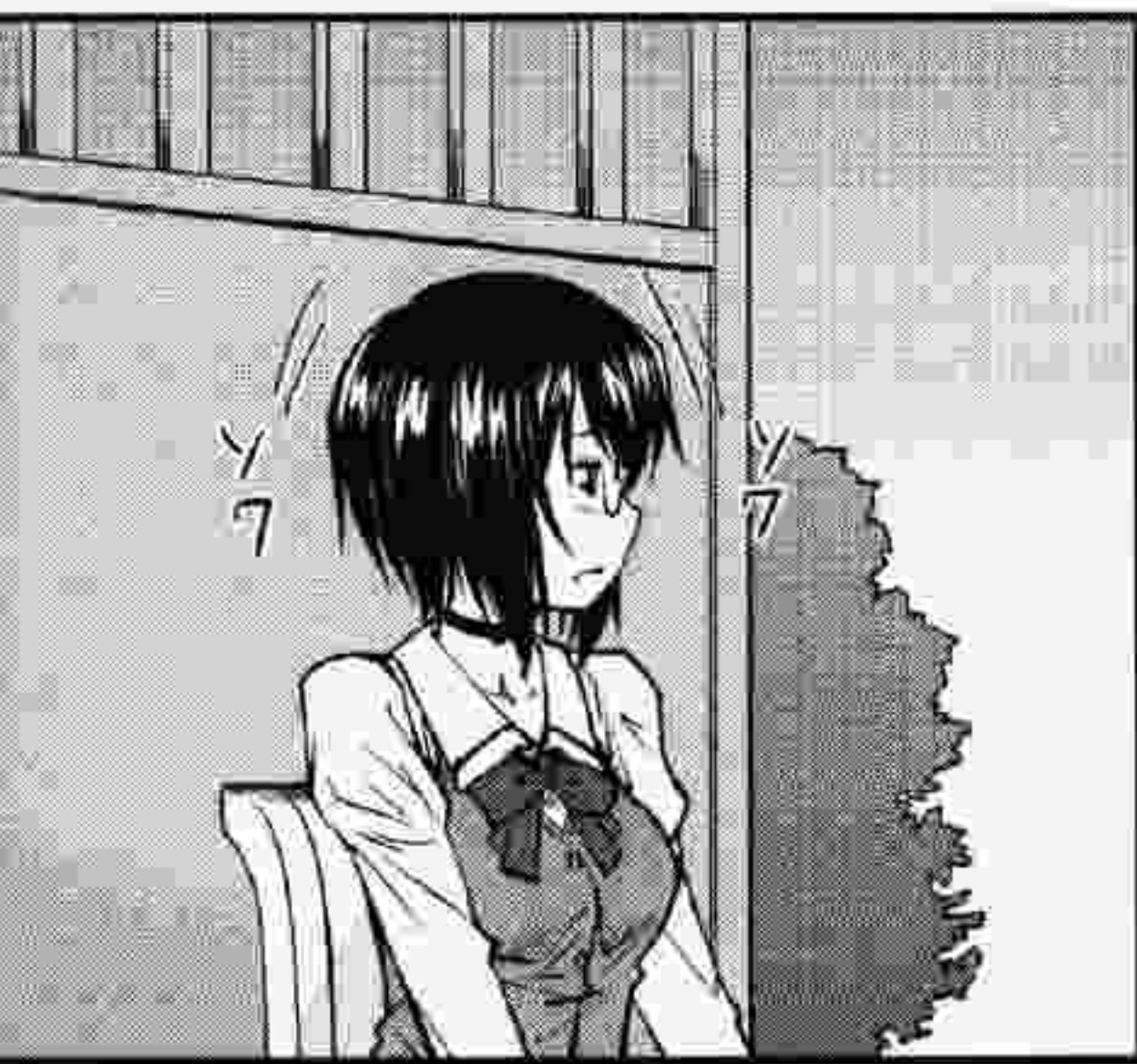
Adult only

26



目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
こみつく 桃ちゃんはちよろいん♪ (ガールズ&パンツァー)		流一本	3
SS 墮ちるとき…… (甘城ブリリアントパーク)		白朧	19
あとがき&奥付			





そ…それで
今日はどこに
行くんだ？



やめ…
ああつ

あ…
チヨ…



えー？
ラ…ラブホテル!?

あ…
イヤ

でもこんな
昼間から…





バ：バカ者
こん：な所で
何して…

や…やめ…

あ…あん♡



こん：な
見られ…

や…

あ♡

あ♡

ああん♡



ん…

はっ…

んん♡

んん♡

んん♡





ま●この穴
すげー
エロくなつたな

バ：バカ
誰がそう
したんだ！

カアア

挿れるなら
早く挿れろ！

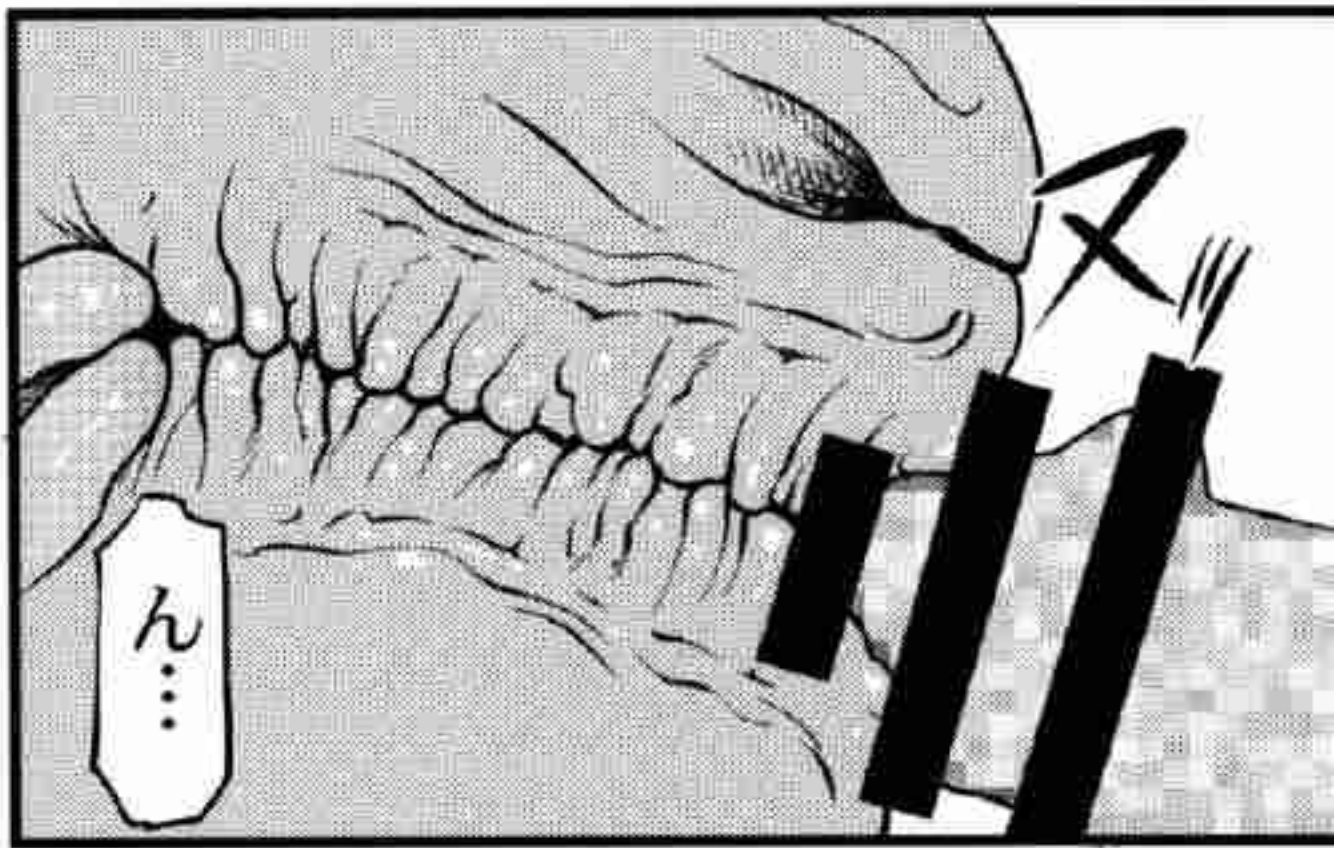


あ♡…あ♡

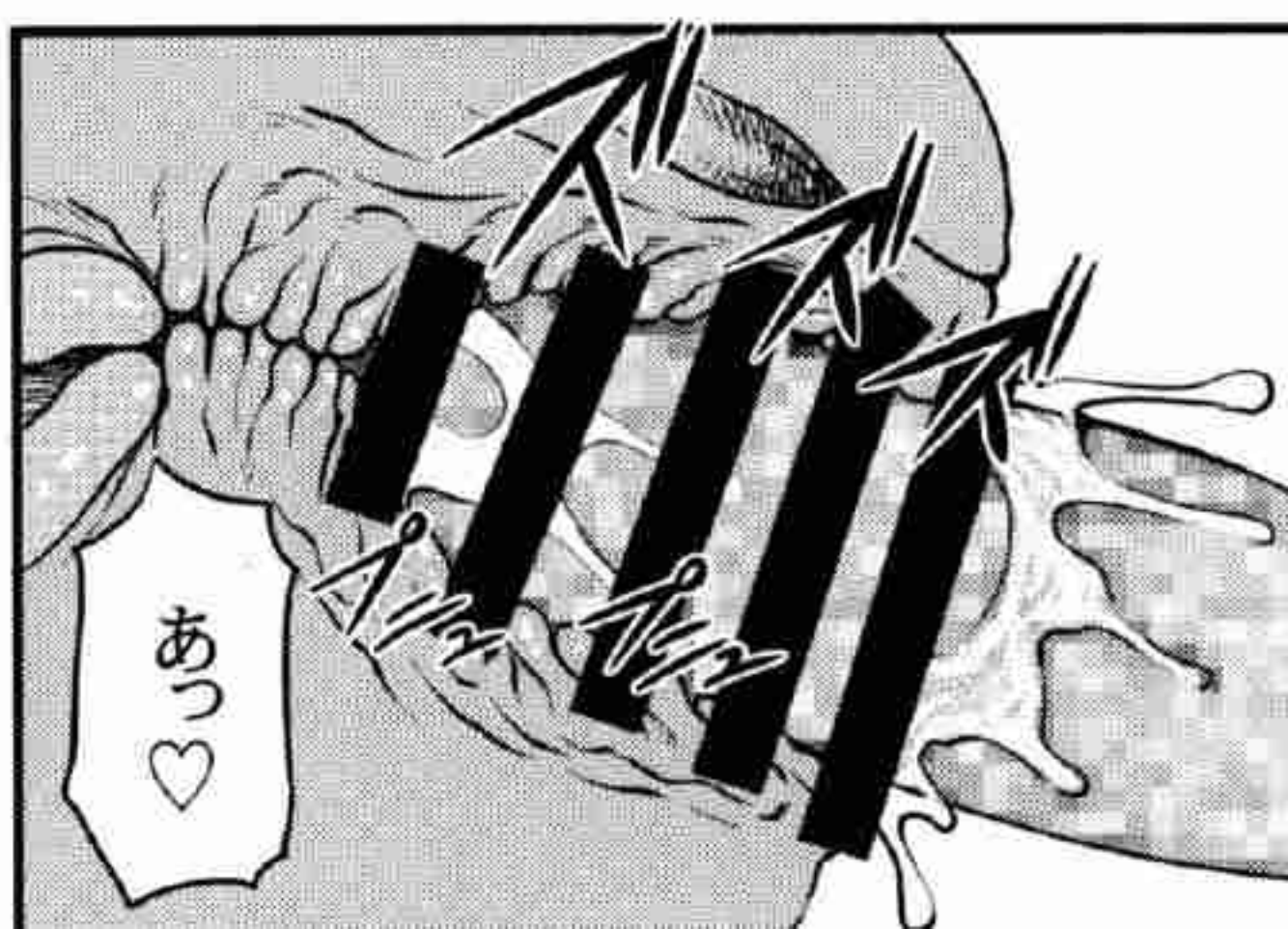
んん



ん…



あ♡





プリプリ
まん肉
サイコー

んほお♡

おお♡

おっ…
おま●こお

おほおお♡

んひ♡

イク♡
イク♡

イクう♡

おま●こ♡

イグうう♡





アミン♡
アミン♡

ンアアアア♡

ワッ
ワッ
ワッ



う……う
バカあ

膣内に射精したら
妊娠してしまっ
だ……ろ……

ワリー
ワリー

でもオレの
子供だったら
うれしいだろ

アミン♡

ん♡

そ……それは
そうだが
私はまだ
高校生だぞ

ちゃんと
責任取って
くれるのか？

取る取る
取っちゃう！



!?

オレもこいつらとの
友情壊したく
ないから断れな
かったんだよね

お前の事
こいつらに自慢
しまくつたら
どうしてもやらせろっ
てうるさくてさ



ふえ？

あー
ところでさ
すつこい大事な
お願いが
あるんだけど



よーし
じゃコッチ
来な！

やっ…



ホンっとゴメン
オレを助けると
思つてさ
頼むよ〜

うはー
いいオツパイ

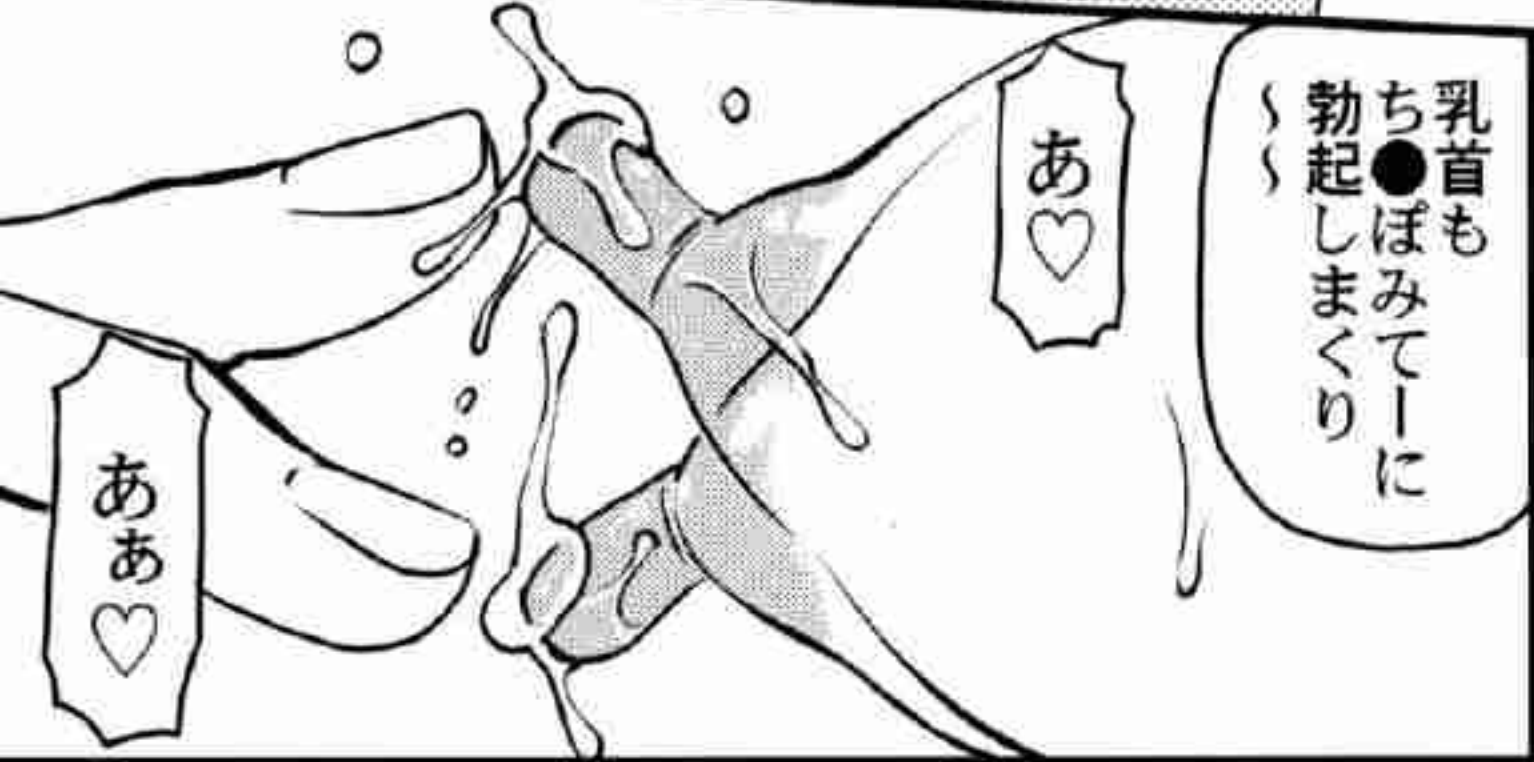
プリケツ
そそる〜

えっ!?

えっ!?

何だ…
コレ？

ナニを…





おー締まるう
汁もトロトロで
こりや何度でも
イケるわ！

あ♡あ♡

うそ

うそ

彼以外の
ち●ぽが♡

彼だけの
おま●こなの
に♡♡♡

それでも感じちゃう
なんてエロすぎ
でしょ♡♡



あっ…ああ♡

太い！

どうせアナルも
調教済みだろ

あっぱ

もっちー

やっ…待って
そこは…

太い♡

うー
射精る
射精る



おほおほ

あじ♡



んひひひひ♡



んじ♡

んぷ♡

んぷ♡



んおおほ♡

おほおほ♡



イツ…
イグう♡

やじ…

イイググ♡♡

あーあ
こりや
ひでえな

でもまあ
十分楽しめたし
また頼むわ

ア…

うー

↑
コ
↑
コ

アへえ♡

今度は別の女も
用意しといてよ

こいつをネタで
おどせば
ひっかかる
でしょー

そーいやコイツ
こんなんでも
生徒会役員
なんだつてな

♡♡♡

おっ!?

うはあ
中身まで
出てきちやつ
たよ

ア…ア♡

ア♡

オイオイ
先にトイレで
出しとけよ



あーあ
穴が両方とも
ひらきつぱなし
じゃないか

あ...

あ...あ

こりゃ今日は
もう出来ないな



なー
ホント
ゴメント
あいつらには
きつく言つて
おくからさ

もう無理だ
別れよう

私はお前の
オモチヤじゃ
ないんだぞ！



仕方ないな
今度だけは
許してやる

わーい
さつすが
桃ちゃん
愛してるっ♡

もっ...
桃ちゃん
ゆーな！



オレには
お前しか
いないんだよ

し...



そんな事
思つてないよー

これからは
もつと大切に
するからさあ

でも...

墮ちる時

ネットでアダルトグッズを注文してしまった。

(安達さんのアニマルビデオのページの脇の変な広告サイトから、つい……)

以前から興味はあった。一年前から支配人代理を引き受け、日常業務のストレスからオナニーの回数が格段に増えていた。

昨日、可児江西也が現れてストレスが軽減されると思ったが、別のストレスがはずの精神にプレッシャーを与えていた。

今日、その荷物が届くはず。業者がきたら他人を寄せ付けずに真っ先に受け取らないといけない。自分がそのようなグッズを購入したということを知られるわけにはいかない。

「おい、千斗。お前宛に荷物が届いてるぞ」

部屋のドアが開かれ、背後から声を掛けられた瞬間、いすずに戦慄が走った。動揺を悟られない様に、いつも通りを意識して、ゆっくりと振り返る。

「か、可児江くん？ に、荷物、あ、ありがとう……」

支配人室ドアの脇に荷物を持った西也がいた。即座に荷物を取り上げようと距離を測る。しかし、机などが邪魔で一足では……。

現在置かれている状況を把握したいすずは決断した。非常な決断を。

が、機制を取ったのは西也だった。

「おっと、シユタインベルガーは出すなよ」

スカートからシユタインベルガーを取り出そうとしていたいすずの動きが止まる。西也はドアを開け放ったまま、身を隠せばそのまま外に出られる状態だった。

「荷物の中身は確認済みだ。俺の記憶を消しても無駄だ。俺が一時間以内に処理しないとこの荷物を千斗いすずが購入したという情報はネットで自動的に拡散さ

れることになってる」

「人の荷物を勝手にッ！ そ、それに情報を拡散って……」

フォーゴットン・レルムで記憶が消去しても、情報は拡散されてしまう。現状、可児江西也に主導権は握られていた。

「もう少し、偽名を捻れ、怪しい荷物は開封して確認するのは当然だろう。全く少しお仕置きしないといけないようだな……」

西也は背中に回した手をだし、持っていたものをいすずの方へと放り投げる。

それは、短めの鎖で繋がれた手枷だった。

「では、それを付ける」

「この手枷は……」

その手枷は、フルーフケットと呼ばれる魔法を封じる手枷だった。西也が手に入れるのは難しいものだが、協力者(ゲスコット)がいれば可能だろう。

いすずは、秘密をばらされるよりはと手枷を嵌めた。

「では、事情を聞かせてもらおうか。何故、こんな物を発注した？」

「……」

いすずは、赤面したまま俯いてしまう。ストレスを、自慰行為で解消していることなど話せるわけがなかった。

この状況からどうすれば抜け出せるのか、思考を巡らせても全く思いつかない。

……長い沈黙が流れていく。

「す、ストレス……よ」

沈黙を破ったのはいすずのほうだった。この状況から抜け出せないと悟り、言葉を取り出した。

「ほう、ストレスか……、お前は俺の秘書であることにストレスを感じているわけだ。こんなアダルトグッズで自慰を行いストレスを発散するほどにッ！」

西也は箱から取り出して、中に入っていた蝶を模した細工がついた装着型のローターをいすずの目の前に示す。

「そ……、それは……、仕方ないじゃないッ！」

語尾を荒げて言い返すと、目の前に西也の顔があった。

「か、可児江くんッ」

「秘書の精神状態の管理も、仕事のうちだ」

西也は強引に唇を重ねてきた。舌が口内に侵入し、舌尖を絡め取られた。

「んッ、んッ、んんッ……ふうん」

深い口づけに、舌を絡め合い、お互いの唾液が口内に交換される。いすずはこの状況に陶酔してしまう。唇が離されると、唾液が名残おしそうに橋を架ける。

「これを、使うか……」

西也は、先ほど取り出したローターアダルトグッズを示す。

いすずは恥じらって両の手でスカートを押さえるて体をくねらせるが、目尻が赤く染まり、熱い吐息が漏れる。桃色の舌尖が艶かしく唇を舐める。よじった腰つきは未熟だが色香が漂う。

先ほどの口内を蹂躪されるキスで昂ぶりを感している。そしてローターを見る目の奥には期待感が見え隠れしていた。

「千斗。お前は従属されることを望んでいるんだ」

西也の言葉が、いすずの頭を駆け巡る。

「わ、たしが……、の、望んでいる……？」

「そうだ、俺がお前のストレスの原因を取り除いてやる」

本人は意識せずにいすずの指はゆっくりと蝶型ローターを持ち上げていた。西也はその瞬間リモコンのスイッチを入れる。

「えッ、や、やだ」

いすずは振動を続けるローターを見て、喉を鳴らした。この異形のグッズが自分のクリトリスに刺激を与えるとどれほどの刺激が与えられるのだろうか、いつも行う自慰より刺激的だろうか、そんな思考が駆け巡る。

「こ、これを着けるの？」

「そうだ。お前は本心では、望んでいるんだ。従属し、束縛され、そして蹂躪されることをなッ！」

西也の言葉にいすずは衝撃を受けた。自分がこのような事を望んでいると言う

のだろうか、しかし、逃げるだけなら西也を組み伏せて逃げる事ができるだろう。

「わ、たしが……、の……ぞんで……」

西也の言葉は水が乾いた砂に染み込んでいくように、いすずの心に染みついてた。

「そうだ、俺が、着けてやる、ショーツを脱ぐんだ」

西也はゆっくりといすずに命令を下した。

いすずは息を呑み、ゆっくりと頷いた。縛られた手枷を鳴らしながらショーツを下ろしていく。片足を上げゆっくりと足を抜き、西也の視線を意識し慌てて陰部を隠そうとする。ショーツは片足首に引っかかるように落ちていった。

羞恥で愛液が分泌されており、室内に女の芳香が充満していく。

「スカートを上げる」

もう、西也の命令に逆らえなくなっていた。いすずは、ゆっくりとスカート捲くりあげる。手枷の鎖が金属音を鳴らす。西也と視線を交えるのは避けているのか、ずっと顔を背けている。

恥じらいの表情は子犬のようだった。その豊富な肢体はまさしく女だった。恥毛のすぐ下に包皮に包まれたクリトリスがあり、西也は蝶型ローターをゆっくり装着させていく。

躊躇いもなくスイッチを入れると、蝶は振動を始め、いすずの陰核に刺激を与える。包皮の上からだが刺激は徐々に広がっていく。

「いやッ、こ、こんな……、あッ、ああッ」

いすずは手枷を鳴らして身悶える。刺激が続くと足の踏ん張りが効かなくなりその場に崩れ落ちてしまった。崩れ落ちた動作で蝶がズレて陰核を擦り上げる。

「きゃッ！」

その衝撃に驚き、慌てて腰を上げる。が、その動作がまた蝶の位置が秘芽を刺す。

「あぐッ」

軀に戦慄が走り、いすずの秘所から潮が吹き出し内腿を生温い液体がったい、

白いニーソックスを汚していく。

陰核の包皮が蝶によって解放されて痛いほどの快感がその身を駆け巡る。快感を振り払おうと腰を動かすと蝶と陰核は擦れ合いますます刺激を与えていく。

いすずは快楽に落ちてゆくのを実感していた。

「んんんッ……はっ、はぁッ……ん　だ、ダメッ、ああぁッ、ゆ、許してッ」

鴨居から吊って、手枷まで長い鎖が支えられたいすずの裸身は薄暗い部屋に幻想的映える。

足を組み替え、白い喉を仰げ反らし、腰を揺らして暴れている。蝶はリズムカールに秘芽を擦り続けたままだ。陰核を包んでいた皮は捲られ刺激は直接伝わってくる。

腰を揺らすと、さらに刺激が増すには理解しても止められなかった。

「いや、いやああ……」

軀の芯に熱い戦慄が背筋から這い上がり、脳髄で暴れる。視界が脳髄からの閃光で朧げになってくる。

脳裏からの閃光のリズムにあわせて秘所から潮が吹き出している。長時間の快感にいすずは疲労の積み重なっていく。

「ああッ、イキそうッ！」

突然、蝶の振動がストップする。絶頂寸前だったいすずの軀は、さらなる快感を欲していた。火照る軀は外気によって冷やされるが、内から溢れる熱は止まらなかった。

「イかせて……焦らさないで……」

西也は見せつけるように、ペニスをいすずの眼前に誇示する。ペニスでならイかせてやると言っているのだ。

いすずはゴクンと喉を鳴らし、ペニスに注視している。……やがて、意を決し声を上げる。

「い、入れて……」

「ん、何をだ？」

「か、可児江くんの、オチンチンを……」

「どこに？」

意地の悪い西也の問答に、いすずは顔を歪めながら答える。

「私の……、ア……、ソコに……」

西也は、秘芽を苛めている蝶を外し、太腿に腕を回して左足を引き上げる。そのまま斜めしたから龟头を秘部に充てがい、勢いよく挿入していった。

「きやあッー、い、いやあ……、こん……な」

少し角度が合わないのか、奥までゆかず、中央をこりこり圧迫させる。Gスポットを刺激し、いすずは喉を鳴らし、ブルブルと軀が痙攣している。そのままもう片方の足も持ち上げ駅弁スタイルへと移行する。いすずの足はすがりつくように西也の体に巻きつく。

西也の熱いペニスが、彼女の温かい膣内を蹂躪していった。

「い、いやッ、やだッ、奥だめえッ」

吊ってある鎖で懸命に支えようとしているが、西也がいすずの腋や胸に舌を這わせると、火照った軀は途端に脱力していく。結果より密着する結合となった。

龟头が膣奥の子宮口の密着し、その感触はペニスに伝わってくる。

「はッ、はぁッ、はあはあ……んんんッ……ああぁッ」

快感の電流が脊髄から脳髄へと駆け抜けて、脳裏で衝撃の爆発となっていく。粘液が結合部から溢れてくる。剥き出しになった秘芽は陰毛に擦られ次々へ刺激を伝えてくる。

陶酔に歪むいすずの表情。長い髪は振り乱し、汗が滲んだ肌に張り付いている。

胸板に密着した胸はむしやぶり付きたくなるような豊満な弾力を伝えてくる。

膣口は西也のペニスを何度も締め付けてくる。

制服の腋からはフェロモンを含んだ女の芳香を放っている。

西也は支えていた手をゆっくりと臀部へと這わせる。そのまま指がいすずのアヌスへと侵入する。

「そ、そこは……、ち、違うッ」

「ここは、後日のお楽しみだ」

その意味を理解したとき、いすずの中に芽生えたのは、未知への恐怖と、さらなる快感への期待であった。

自分の中に浮かんだ物を振り払い、かのように頭を振り回す。初めはあった異物感が膣からの快感により押し流されてしまう。

西也がゆっくりと指を抜くと、「ああッ」と名残押しそうな声をあげる。アナルへの刺激がアクセントとなり、紛れていた快感の大波が襲ってきた。

子宮とクリトリスが快感を発し、全身が性感帯となったように刺激を送り続けてくる。西也が腕でいすずを支え、膣の中央部を刺激しつつ、一気に膣奥まで貫いていく。

「ああああッ、だ、だめッ」

子宮が喉から出そうな勢いだった。子宮の疼きはなお激しく、舐めの中は熱くなつたモノが弾け飛びそうだった。いすずの四肢は痙攣を始めていた。

「イクッ！」

いすずは舐めが、ピクンと震え脱力していく。

その体を支えながら、西也は溜まったものをいすずの膣奥へと解放していく。

「うっ」

いすずが絶頂時の快感にひたっていると、膣壁は放たれた精液を子宮に収めようと蠢いている。いすずへ快感の追い打ちが響いていく。

「ああッ……、ああッ……」

西也によって支配された。いすずの胸にあるものは悦びだった。

自分がこんなに解放された気分になったのは始めてだった。

西也の精液が、熱くて濃い精液が、いすずの膣内に充満されていく。全身が悦んでその支配を受け止めていく。

ぐったりとしたいすずを部屋に放置して、西也はドアから部屋を後にする。

（やったミー！この一週間、ずっと可児江くんを観察してた甲斐があったミー。この肉糞マーク2も、高かったけどいい買い物だったミー。思えばツライ日々だったミー。くくくッ、次は誰を頂くとするかミー。情にほだされそうなミー

スちゃん、シユチュエーションに弱そうなコボリーちゃん、押しに弱そうなサーラマちゃん、ガチ天然なシルフィーちゃん。迷うミー。しかし、登り始めてしまったミー。この男の夢坂をミー！）

終 幕

あとがき (&グチ)

流一本 毎度お買い上げありがとうございます。
白朧 今回はガルパンの河嶋桃ちゃんが開られていますね。
流一本 桃ちゃんのぽんこつ具合が可愛くて可愛くて。もう、うちに
来てくれないかなー。
白朧 けいおんの和の時もそんなこと言ってたよな。あっしは甘フ
リが、結構面白かったののでついやってしまった。
くろうさぎ 甘フリ？ 甘城フリなんとかってやつか？
白朧 正直、結構な人は甘フリアニメにするなら、フルメタ続きを
作ってと思ったでしょうが、まあ面白かったの。
三匹のゲスコットとかな。
くろうさぎ 巷は、艦これとか妖怪とか騒がれているわけだが。
白朧 誰も艦これに手をだしてないだろ。妖怪もわからんし。
わかるのか？
くろうさぎ 仮面ライダーなら・・・。
流一本 艦これはアニメが始まったみるかも。
白朧 ガルパンも劇場があるんだろ？
流一本 観に行けるかなあ。

12月某日(クリスマスなにそれ?)
寒い冬に作業中、あと少しです

奥付



リーフパーティー
発行日 2014/12/30
著者 くらうさぎ

ホームページアドレス

<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止

Kalevala Scans

カレワラスキャン



Scanner
Kalevala

www.kalevalascans.net

#kalevala@rizon.net

Please support the artist
by buying the original!

作家に金を寄越せ
この変態どもめ！



LeLe!まぐま

Vol.26

